

程度副詞モットの解釈

九州大学文学部人文学科
言語学・応用言語学専攻
2012（平成 24）年入学
1LT12044E 久保舞珠

2016（平成 28）年 1 月提出

要旨

本稿では、鷲田（2000）に出てくる「ひとの話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもっと選択的な行為である」という文の解釈を巡って、モットに関する先行研究を基にして考察を行った。当該文の解釈はモットのとり比較対象によって、解釈が二通りに考えられると思われた。

しかし、先行研究に基づいて当該文を考察してみると、モットがとり比較対象と文の解釈は関係がないことが分かった。モットの解釈が二通り考えられた要因は、当該文と前述内容の関係性をどのように捉えるかにあったのである。文章全体の構造を考えればどのような関係性になるのかは推定でき、当該文の解釈も一通りに絞ることができた。

ではなぜもう一方の解釈も十分にその可能性が考えられたのか。それは、モットは程度副詞であるにもかかわらず、当該文では程度性を持つようには一般には思われぬ「選択的な」という単語に接続していたため、正しい解釈が妨げられたからと考えられる。このことから、程度性を持つ要素に接続するというモットの特性は極めて重要な性質であり、それが成り立つようにしかモットの解釈はできないということが分かった。

目次

1. 問題となるモットの例文	1
2. 仁田 (2002)	3
2.1. 程度副詞の働き	3
2.1.1. 形容詞への限定	3
2.1.2. 副詞的成分への修飾・限定	3
2.2. まとめ	4
3. 奥村 (1995)	5
3.1. ズットの用法	5
3.2. モットの用法	5
3.3. モットが連体節の一部となっているとき	6
3.4. まとめ	7
4. 林 (2000)	8
4.1. モットの「否定的用法」	8
4.2. まとめ	8
5. 木下 (2001)	10
5.1. 視点表現としてのモット	10
5.2. 視点の定義と種類	10
5.3. モットの視点のとり方	10
5.3.1. 現在・現実・現場を視点とする場合	11
5.3.2. 比較直前の談話を基準とする場合	11
5.4. 程度スケールのとり方	12
5.5. まとめ	13
6. 考察	14
6.1. 奥村 (1995) について	14
6.2. 林 (2000) について	14
6.3. 木下 (2001) について	18
7. 結論	22
8. 参考文献	23
9. 付録：鷺田清一 (2000) 「聴くということ」全文	24

1. 問題となるモットの例文

鷺田清一の「聴くということ」(2000)に出てくるモットという言葉の意味に疑問を持った。鷺田(2000)の内容を一部抜粋する。

(1) (聴くといえば、だれもおそらく、耳で、と答えるだろう。聴覚は鼓膜に伝わる空気の振動を聴覚神経が脳に伝えて……と、むかし学校で習った記憶がある。しかし、聴くという行為が、耳です、ただたんに音響情報を受けとるという受動的な行為だととはとても信じられない。

たとえば、数名がおなじ部屋にいてもおなじ音を聴いているとはかぎらない。どこからともなく響いてくるBGMを聴いているひともいれば、作文しているワープロのキーを打つ音に神経を集中しているひとや部屋の外の鳥の鳴き声に耳を澄ませているひともいる。後者のひとたちにはBGMの音はほとんど聞こえていない。走る電車のなかにも、となりのひとと話していると、あるいは本を読んでいると、その轟音はほとんど耳に入っていない。聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。)

ひとの話聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもつと選択的な行為である。(相手が親しいひとなら、きちんとその言葉を受けとめていないと、「ちゃんと聴いてるの?」「聴く気はあるの?」と問いつめてくる。

「愛さないと見えないものがある」と言った哲学者がいる。「愛が認識を基礎づける」という言い方で。「愛さないと」という言い方がちょっと重すぎるとすれば、「相手に関心がない」と言い換えてもよい。) ¹

ここで疑問に思われたのは、「ひとの話聴くということ」と何を比較して「ひとの話聴くということはじつはもつと選択的な行為だ」と言われているのだろうかということである。「ひとの話聴くということ」の比較対象として以下の二つの可能性を考えた。

- (2) a. ひと話を聴くということは、音楽などのひと話以外のものを聴くということよりモット選択的な行為である、という文である場合。ここでの比較対象は「(ひとの話以外を)聴くということ」である。
- b. ひと話を聴くということは、あなた(読者)が思っているよりモット選択的な行為である、という文である場合。ここでの比較対象は「読者の思っていること」である。

¹ (1)における丸括弧及び下線は本稿においてつけたものである。

(2a)では、「聴くということ」と「ひとの話を聴くということ」を比較して後者のほうが選択的である度合いが高いということを表しており、(2b)では、「ひとの話を聴くということ」は「読者の想像」よりも選択的度合いが高いということを表している。比較対象が(2a)だと考えた場合は(3a)、(2b)だと考えた場合は(3b)のような解釈になる。

- (3) a. ひとの話を聴くことは、ひとの話以外を聴くことと同様に選択的な行為であるが、じつはひとの話を聴くことの方がそれが選択的である度合いが高い。
- b. ひとの話を聴くということが選択的な行為だとは思えないかもしれないが、じつはひとの話以外を聴くということと同様に選択的な行為である。

(3a)は前述の内容を前提として捉えて解釈が行われている一方、(3b)は前述の内容を考慮することなく解釈が行われている。(2a)と(2b)のどちらを比較対象と考えた場合が正しい解釈なのだろうか。モットについての先行研究を参考にして考察していきたい。

2. 仁田 (2002)

仁田 (2002) ではモットの属する程度副詞の性質や特性について述べられている。第 2 章では仁田 (2002) の主張をまとめる。

2.1. 程度副詞の働き

程度副詞の働きについて、仁田 (2002 : 145) ではその基本・中心を「通説に言うように、属性 (質) や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定する、というもの」であるとしている。すなわち、程度副詞の働きは、属性 (質) や状態がもっている幅、つまり程度性に対して、その程度の大きさに言及し属性や状態の様を限定し特徴づけることを基本としている。これは、程度性は幅を持っているということと、多くの属性や状態は程度性という側面を帯びて存在しているということの二つの事柄を踏まえて成り立っている。ただし、すべての属性や状態が程度性を有しているわけではなく、また「暗い」「新しい」などその程度に限界をもつものもあるとしている。

2.1.1. 形容詞への限定

程度副詞が限定するものの典型として形容詞がある。形容詞の限定には、程度副詞による程度限定に加えて、様態限定によるものもある。様態限定とは、仁田 (2002 : 151) によると「形容詞の表す属性や状態の実現のされ方を、主に属性・状態の様態の側面への言及によって、限定し特徴づけている形式」である。ただし、程度限定と様態限定は明確に分けられるものではない。「形容詞の表す属性・状態にあつては、様態的な限定を行うことが、結果として程度性に関わり触れることになり、様態的な限定と程度的な限定とは深くつながっている」と仁田 (2002 : 152) では述べられている。

2.1.2. 副詞的成分への修飾・限定

程度副詞は、(4)のように述語のみならず副詞的修飾成分も修飾する。

- (4) 「ゆうべひどく熱心にあなを推せんされましてね」 (小林久三「赤い落差」改)
2

ただし、程度副詞と、結果の副詞や様態の副詞といった副詞的修飾成分には、前者が後者を修飾・限定するという階層性が見られる。すなわち、[程度[あり様[動き]]]という三層構造である。結果の副詞や様態の副詞は、動きの実現のされ方を表し、動詞のもつ動きの

² (4)は仁田 (2002 : 155) からの引用である。

最終結果や展開過程の局面に出現するあり様について言及し、それを限定したり特徴づけたりするものである。それに対して程度副詞は、そのようなあり様のもつ程度性についてさらに限定したものである。したがってこのような階層性になると考えられる。

また、程度副詞は、時間関係の副詞や頻度の副詞も修飾・限定できる。

- (5) 私は、こちらでもややしばらく黙って、わざとらしく、じろじろ女の顔を見ていたが、… (近松秋江「黒髪」改)³
- (6) 日産自動車の辻義文社長は十四日の記者会見で、…「現在検討中で、まだ詳細を話す段階ではないが、今後完成車や部品の相互融通や共通仕様が相当ひんばんに出てくと思う」と述べた。(朝日新聞 1993.1.14 改)⁴

2.2. まとめ

程度副詞は属性(質)や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定するという機能を持つ。したがって程度副詞の一種であるモットの働きも、後続する属性や状態の程度性を修飾するという働きがあると言える。

³ (5)は仁田(2002:155)からの引用である。

⁴ (6)は仁田(2002:156)からの引用である。

3. 奥村(1995)

奥村(1995)ではズットと比較してモットの用法について考察している。第3章では奥村(1995)の主張をまとめる。

3.1. ズットの用法

奥村(1995)ではズットの用法を以下のようにモデル化している。

- (7) a. XはYよりずっとZ (Zは比較に関わる状態の述語)
1: XとYが明らかに同種であるもの
2: XとYが解釈の結果同種のものであることが解るもの
b. ずっとW (Wは動作の述語、または比較にかかわらない状態の述語)

(7a)のような比較の文はXについての言明であるが、その中でもXについてYを基準にして「Zであること」について述べたものである。奥村(1995:94)では、この「Yを比較基準値、Xを言及値と呼び「Zであること」の評価軸上に位置づけて」考えている。これに沿って考えると、「ずっと」は、Z軸上の比較基準値Yと言及値Xとの距離が大きく隔たっていることを示すと考えてよい(奥村(1995:94))。一般に「Zであること」に関して、「Zである」とは言えない点が存在すると考えられるが、それを奥村(1995)では0値と呼んでいる。ズットはこの0値とYの位置関係について制限がない。すなわち、「YはZである」という事実はズットの用法には必要ない。ズットにおいては0値という絶対的な基準値よりもYという比較基準値の方が重要であるということがわかる。

奥村(1995)では(7a)と(7b)の関係について、両者が関連付けられるという前提を設けた場合に、いかにして関連付けられるのかについて考察している。(7b)は時間を表す文で用いられるが、(7a)には述語が評価にかかわるものと距離にかかわるものがある。(7a)の評価と(7a)の距離がつながり、(7a)の距離と(7b)の時間がつながることによって(7a)と(7b)は間接的に関連づけられると考えている。

3.2. モットの用法

奥村(1995)はモットの言い切りの形をモデル化すると次のようになると述べている。

- (8) a. XはYよりもっとZ (Zは状態)
b. もっとZ (Zは動作)

(8a)について、奥村(1995:96)では「Yが0値を基準にしてZであるという性質を持

っており、また X が 0 値を基準にして Z であるという性質を持っており、その二つを比較すると Y が持ち得ている Z の性質を大きく越えて、X が Z であることが成り立っている、というのが「もっと」で表現されていることだ」と考えられている。すなわち、X も Y も 0 値を越えて Z という性質であり、その Z という性質が Y より X のほうが強いということをもっとは表すということである。このような性質から、モットにおいてはズットとは異なって 0 値の位置が考慮の対象になる。

(8b)について、Z と表した動作には、多くの場合、文末に一定の決まりがあると奥村(1995: 97)では指摘されており、Z について(9)のような文末の制限を唱えている。

- (9) a. 義務・命令を表すもの
- b. 希望・意志を表すもの
- c. 推量を表すもの

奥村(1995)では、(8a)と(8b)の違いの一つに、「Y は Z である」という前提が必要かどうかという点があると述べている。つまり、(8a)は先に述べたように「Y も Z である」という前提が必要であるが、(8b)にはそれが必要ないということだ。(8b)であえて前提と言えそうなものをあげるとしたら、それは発話時の現状だろうと奥村(1995)は述べている。(8b)のタイプのモットの性質は、(8a)のような対象同士の差というよりも、大きな差をつけている・大きく越えているということを前面に出す点にあると言える。だから暗黙の前提として現状を置き、その現状からの変化を求めたり予想したりする(9)のような発話者の意見表明ともいえる文末表現が好まれるのだと考えられている。

3.3. モットが連体節の一部となっているとき

奥村(1995)ではモットの用法を、述語が言い切りの形であるときに限定してモデル化している。その理由として、モットが連体節の一部となっている場合には述語が言い切りの場合ほどその使用条件ははっきりしなくなるからだと述べている。

- (10) 今年の女子学生の就職はとても大変だったが、来年はもっと厳しい状況が待ち構えている。(奥村 1995: 99)
- (11) もっと礼儀正しい人を探すべきだ。(奥村 1995: 99)

(10)、(11)はともに(8a)のようなタイプであるが、(10)では同質の前提をもち、(11)では同様の前提をもたない。このような現象が起こるのは、(8a)、(8b)という「使用環境の違いによって「もっと」の持つ特性が共通性を持ちつつも互いに異なっているのだが、連体節においてはその違いが弱化されるから」だろうと奥村(1995: 99)では指摘されている。

3.4. まとめ

奥村(1995)では、モットの言い切りの形を(8)のようにモデル化している。奥村(1995)では(8a)と(8b)の違いは、「Y も Z である」という前提が(8a)は必要で(8b)は不必要であることだと述べている。また、(8a)と(8b)の例文を見るに「X は」や「Y より」という文言自体の有無は問うていない。これらを踏まえて奥村(1995)のモットの用法をまとめると以下のように示すことができる。

- (12) a. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「Y も Z」という前提が必要 Zは状態)
- b. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「Y も Z」という前提は不必要 Zは動作)

4. 林 (2000)

林 (2000) ではモットの用法について奥村 (1995) を基にして考察が行われている。第4章では、林 (2000) の主張をまとめる。

4.1. モットの「否定的用法」

奥村 (1995) はモットの言い切りの用法を(8)のように表したが、林 (2000) は奥村 (1995) の説明は十分ではないと主張している。奥村 (1995) では、(8a)と(8b)の違いを「Y も Z である」という前提が必要かどうかであるとし、(8b)にはその前提が必要ないとしている。しかしながら、「Y も Z である」という前提が必要ないのは、(8b)の場合のみに限られないと林 (2000) は述べている。すなわち、「Y も Z である」という前提が必要ないのは、Z が動作の場合のみに限られたものではないということだ。佐野 (1998) では、モットのこの用法を「否定的用法」と名づけており、モットの否定的用法とは、「話題になっている Y、或いは現状を否定し、X はそれ以外であること、或いはそれ以上であるということ」を述べるもの⁵ (佐野 1998 : 108) であると述べている。林 (2000) は佐野 (1998) を用いてモットの否定的用法について説明を加えている。

(13) 私が言っているのはもっと別の問題だ。(佐野 1998 : 109 改)

(14) この店の料理は昔はもっとおいしかった(のに、今はおいしくない)。(佐野 1998 : 108)

(13)や(14)はモットの否定的用法の例である。奥村 (1995)、佐野 (1998) の両稿に提示されているモットの否定的用法の例には、いずれにも比較基準「Y より」が明示されていない。このことから、林 (2000 : 8) では、「比較基準「Y より」が明示されないことによって、「もっと」の解釈が「否定的用法」に傾くもの」と捉えている。

4.2. まとめ

林 (2000) のモットの用法に対する捉え方を(12)と同じ形で表すと以下のように表現できる。

- (15) a. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「YもZ」という前提が必要)
b. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「YもZ」という前提が不必要) 【否定的用法】

⁵ 4章における佐野 (1998) は林 (2000) からの引用である。以降もこれに倣う。

林 (2000) では、奥村 (1995) の主張を用いて持論を展開している。奥村 (1995) の主張を再度確認しておく。

- (12) a. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「YもZ」という前提が必要 Zは状態)
b. (Xハ) (Yヨリ) モット Z (「YもZ」という前提は不必要 Zは動作)

林 (2000) は、(12b)について「Y が Z である」という前提が必要ないものは Z が動作のときに限らないと主張している。すなわち、Z が状態のときでも「Y が Z である」という前提が必要ない場合があると主張している。そして、その用法を否定的用法と呼び、比較の基準が明示されていない場合否定的用法に傾くと捉えている。林 (2000) の考えでは、否定的用法は比較の基準が明示されていない場合であるから、否定的用法には奥村 (1995) の(8b)の場合も含まれる。すなわち、Z が状態の場合のみを否定的用法と捉えているのではなく Z が動作の場合も否定的用法と捉えている。また、林 (2000) で言及している否定的用法には、モットが言い切りの形になっている場合とモットが連体節に接続している場合の両方が含まれている。したがって、(15)は言い切りの場合に限らず、モットが連体節の一部となっている場合も含まれると考えられる。したがって、Z は言い切りの形のみならず連体節の形になっている場合も表している。ただし、モットが連体節をなしている場合における Z の条件については林 (2000) で言及されていないため Z についての条件は記述できない。

5. 木下 (2001)

木下 (2001) ではモットの根本概念とは何かということを論じることで、モットの用法について考察している。第 5 章では、木下 (2001) の主張についてまとめる。

5.1. 視点表現としてのモット

佐野 (1998) では、ズットとモットを比較して、モットの特徴は「(X だけでなく) Y も A である」という前提が必要であることだと述べている。しかし、「Y も A である」という前提がモットを用いるときに必ず必要だというわけではない (渡辺 1986、佐野 1998)⁶。このようなことから、木下 (2001) ではモットを捉える根本的な概念として、「Y も A である」という前提を必要とするという事は不適切であり、何か他の可能性が考えられると主張している。木下 (2001) はその新たな可能性として「視点」という概念を提案している。

5.2. 視点の定義と種類

澤田 (1993 : 303) によると、「視点」とは、「言語行為(Speech Act)において、話し手(あるいは書き手)がある出来事を描写しようとする時に話し手(あるいは書き手)自身が占めている空間的(spatial)、時間的(temporal)、心理的(psychological)な位置」である⁷。木下 (2001) によると視点には二つの種類がある。ひとつは客観的視点、もう一つは主観的視点だ。前者は、二つの対象 X、Y を客観的位置から見る場合で、後者は視点を一方の側に置き、そこからもう一方を見る場合である。木下 (2001 : 18) では、モットは主観的視点をとると主張されている。つまり、モットは何かを基準にそれを視点として物事をみることが意味する。その視点・基準となるのは話し手の現在地である。現在地というのは、空間的、時間的、心理的側面から考えられる現在地である。したがって、現在・現実・現場の状態や、話の中で比較が用いられる直前に話されている状態がモットの比較の基準となると木下 (2001 : 18) は説明している。

5.3. モットの視点のとり方

木下 (2001) ではモットの視点のとり方に二つのパターンがあると述べている。

⁶ 5 章における渡辺 (1986)、佐野 (1998) は木下 (2001) からの引用である。以下もこれに倣う。

⁷ 澤田 (1993) は木下 (2001 : 18) からの引用である。

5.3.1. 現在・現実・現場を視点とする場合

モットの視点一つとしてまず話し手がいる現在・現実・現場を視点(基準)とする場合がある。このような場合、モットは現在または現在の状態を比較の基準と置き、それに対する未来や過去をもう一方の比較の対象としている。

(16) (レストランで料理を食べながら) 前に食べた時はもっとおいしかった。(木下 2001 : 19)

もしくは、現実に関起った事実を基準として、実際に現実には起こらなかったことをもう一方の比較対象とする場合もある。なお、話し手の現在地を基準とする場合、(17)のように「Y より」という形で比較の基準が明示されていないことも多い。

(17) もっとお金があったらなあ。(木下 2001 : 19)

このように比較の基準が明示されていない場合にも、モットは比較の基準は現状であると解釈することが可能である。

5.3.2. 比較直前の談話を基準とする場合

モットの視点の二つ目として、比較直前の談話を基準とする場合がある。この場合、話の中で比較を用いる直前に述べたことが比較の基準・視点となる。談話の中で基準を任意で設定すればよいので、先に述べた現在・現実・現場を基準とする場合と異なり「過去」を基準とし「現在」をその比較対象とすることも可能だ。

(18) 30 年前は 1 ドル 360 円だったが、最近、円はもっと高くて、1 ドル 110 円前後だ。(木下 2001 : 21)

また、基準を明示するときには「～より」を用いることが多い。しかし、いつでも使われるというわけではなく、比較の基準が直前に述べられているときには省略されることも多々ある。「～より」での比較の基準の明示がない場合、比較の基準が既に先行文脈中に存在するかどうかは「それより」を挿入することで確認できる。「それより」が挿入できない場合、比較の基準が設定されていないため、モットの容認度はきわめて低くなる。

(19) a. 葡萄と梨どっちのほうが好き?

b. *それより葡萄のほうが(もっと)好き。(木下 2001 : 16 改)

(20) a. 葡萄と梨どっちのほうが好き?

b. 梨も好きだけど、それより葡萄のほうが（もっと）好き。（木下 2001 : 16 改）

以上のように、先行文脈中の談話に基準を置く場合には、基準についてあらかじめ何らかの形で言及されている必要がある。そうすることで視点を置く位置が決定されるからである。一方で、「X ハ Y ヨリモ A」「Y ヨリ X ノハウガ A」のような副詞を用いない「φ」では客観的視点がとられる。そのため、基準について前もって言及される必要はない。

5.4. 程度スケールのとり方

モットが視点をういた表現であるということは、モットによる比較表現を程度スケール上で行う場合、程度スケールの向きに視線を合わせるということを意味する。「(X ハ) (Y ヨリ) モット A」「(X ノハウガ) (Y ヨリ) モット A」という文で程度スケールと比較対象 (X、Y) がとる位置には、次の三つのパターンがある。一つは両極の程度スケール上での比較のときだ。この場合、基準である Y は 0 より A 側に位置し、X はさらに A 側に位置する。Y が ~A となることはないので ~A を基準とすることはできない。二つ目は一方向の程度スケール上で比較の場合だ。この場合には X が Y より A 側に位置していれば、基準である Y の位置はどこでもよい。つまり、両極性のスケールでは ~A に相当する位置にも置くことができる。したがって、この場合モットは基準が A である必要も比較対象 X が A である必要もない。0 の位置も自由であるからだ。三つ目は程度性のない比較の場合だ。モットによる比較は必ずしも程度スケール上で行われるとは限らない。というのも、モットは現在心の中にあることとは異なることを提示する表現だからである。

(21) 「質問が漠然としすぎているのかな?」「ええ、そうね。たぶんそうだと思うわ」「じゃあもっとべつのお話をしよう」と僕は言った。（村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」）⁸

このように「別に」「ほかの」など一部の単語に限り、程度性がなくてもモットを用いて表現することができる。

三つの程度スケールのうち、どれを用いるかは比較対象の関係性によって決まる。二つの対象が対立的であると思われる場合には両極性のスケールが喚起される。しかし、先に述べたように両極性のスケールでモットを使用するときには、Y は 0 より A 側でなければならない。すなわち、「Y は A」でなければならない。したがって、そのような文脈では比較の基準は A でなければならない、~A の状態を基準にするのは難しい。それに対し、対立的意味が和らぐ文脈においては一方向性のスケールを想起することも可能になり、~A

⁸ (21)は木下 (2001 : 24) からの引用である。

の状態を基準にすることもできうるだろう。モットの比較の基準として現在・現実・現場の状態が扱われる場合、比較の基準の状態については言葉として明示されない。したがってこのような場合には、比較対象同士の対立性は弱く、比較の基準が ~A の状態でも容認できる可能性が高くなる。

5.5. まとめ

木下 (2001) では、モットは視点表現であり、その視点のとり方には話し手の現時点を視点とする場合と比較の直前の談話を視点とする場合の二つの場合があると述べている。また、5.4.でモットのとりうる程度スケールについて言及しており、程度スケールには両極性をもつもの、一方向性のも、程度性がない場合の三パターンがあると述べている。この程度スケールについての言及は A についての記述と解釈できると考えられる。これらを踏まえて木下 (2001) の主張するモットの用法を(12)や(15)と同様に表現すると以下になる。なお、木下 (2001) では A と表されていた述語部分は Z と表すこととする。Z は程度スケールを表すので、「両極性をもつもの」又は「一方向性のも」又は「程度性のないもの」のいずれかである。

(22) a. (X ハ) (Y ヨリ) モット Z (比較直前の談話を基準とする)

b. (X ハ) (Y ヨリ) モット Z (話し手の現時点を基準とする)

6. 考察

第6章では、先行研究を基にすると(1)の解釈がどのようになるのか考察していく。

6.1. 奥村 (1995) について

奥村 (1995) のモットの用法は以下のようにまとめられた。

- (12) a. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (「YもZ」という前提が必要 Zは状態)
b. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (「YもZ」という前提は不必要 Zは動作)

奥村 (1995) の主張に基づく、(1)のモットの用法はどちらにあたるか検討する。(1)では「ひとの話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもっと選択的な行為である。」と書かれており、モットは連体節をなしている。したがって、奥村 (1995) がモデル化した言い切りの形ではなく、奥村 (1995) の主張を用いて(1)の意味について考察することはできない。

6.2. 林 (2000) について

林 (2000) ではモットの用法について以下のように考察している。

- (15) a. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (「YもZ」という前提が必要)
b. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (「YもZ」という前提が不必要) 【否定的用法】

(15a)、(15b)の意味の違いについて林 (2000) は明言していないが、(15a)と(15b)にはその意味において明らかな差異があると考えられる。(15a)は「さらに」や「それ以上に」といった累加の意味がある一方、(15b)には累加の意味はなく「～ではなくて」「～ではないが」という否定の意味があるということである。林 (2000) が参考とした奥村 (1995) でも述べられているように、(15a)はX、Yともに「Zである」という性質を持っており、Yが持ち得ているZの性質をXが持つZである性質が大きく超えていることを表している。つまり、「YがZであること」よりさらに、それ以上に「XはZである」ということだ。このように(15a)は「さらに」や「それ以上に」という意味である。一方、(15b)の否定的用法については「話題になっているY、或いは現状を否定し、Xはそれ以外であること、或いはそれ以上であるということ」を述べるもの (佐野 1998 : 108) とされている。「話題になっているY、或いは現状を否定し」とは解釈としてはどのような意味になるのか、実際に林 (2000) で提示されている否定的用法の例をもとに考えてみたい。

(13) 私が言っているのはもっと別の問題だ。(佐野 1998 : 109 改)

(14) この店の料理は昔はもっとおいしかった(のに、今はおいしくない)。(佐野 1998 : 108)

(13)において否定されているのは現状であり、「現状のものではなくて」という意味だと捉えられる。(14)でも現状が否定されているが、(13)とは違い「現状はZ(おいしい)ではないが」という意味だと解釈できる。このように佐野 (1998) の否定的用法の定義における「話題になっているY、或いは現状を否定し」というのは「Yではなくて」「現状ではなくて」というYや現状そのものを否定する文脈と「YはZではないが」「現状はZではないが」という「比較対象がZではあること」を否定する文脈の二つの意味としてとらえることができる。言い換えると、否定的用法は「Xは現状(またはY)ではなくZ」という意味もしくは「現状(またはY)はZではないがXはZ」という意味になる。否定的用法では、「XがYや現状以外またはそれ以上であることが述べられる」とされている。しかし上記に示した否定用法の解釈に基づく、Yや現状はZではない。したがって意味理解においては、「Xが、現状やY以上にZである」ということは考える必要がないと言える。これは(15b)がYもZであるという前提が不必要なことも大きく関連しているだろう。したがって、(15b)の意味は「さらに」や「それ以上に」といった累加の意味は含まず「～ではなくて」「～ではないが」という否定の意味に重きが置かれていると考えられる。このように林 (2000) で示された(15a)と(15b)には意味において大きな差があり、(15a)は「さらに」「それ以上に」という累加の意味、(15b)は「～ではなくて」「～ではないが」という否定の意味であるといえるに違いない。

さて、林 (2000) の主張に基づいて(1)はどちらの用法になるか検討する。林 (2000) のモットの二つの用法は、言い切りの形である場合のみならずモットが連体節の一部となっている場合についても記述している。したがって、モットが連体節の一部となっている(1)にも適用可能である。(1)が(15a)と(15b)のどちらの用法なのか考えていきたい。両者について、その違いは「YもZである」という前提が必要かどうかということのみであり、Zに関する記述はない。したがって(1)において、「YもZである」ということが前述されているかということを検討しなければならないが、比較の基準となるYが何であるかがはっきりしないためすぐには結論が出せない。そこで、(15a)と(15b)の場合のそれぞれで、比較対象Yが「聴くということ」である場合とYが「読者が考えているもの」である場合の計4通りの意味がどのようになるのかを検討していくこととする。

まず(15a)のときについて考える。(15a)の用法で、Yが「聴くということ」であった場合、すなわち(2a)の場合には(1)は次のようになる。(音楽などひとの話以外を聴くということも選択的な行為であるが)ひとの話以外のものを聴くということよりも、ひとの話を聴くということはさらに選択的な行為である。音楽などを聴くということも選択的であるが、

それが選択的である度合いよりもひとの話を聴くということが選択的である度合いのほうが大きいということである。では、ひとの話を聴くということが選択的行為である度合いが高いとは具体的にどういうことだろうか。鷺田（2000）では、「聴くということ」は選択的行為であると述べられている。それは、鷺田（2000）では「聴くということ」を次のように捉えているからだ。ある空間に人がいるとき、その空間には様々な音が鳴っているが、人はそこにあるすべての音を聴くことはできず一部のものしか聴いていない。これは見方を変えれば、様々な音の中から何にその人が注意を向けるのかという音の選択が行われていると解釈できるということだ。だから鷺田（2000）では「聴くということ」は選択的行為であると述べている。そして、ひとの話を聴くということは「（ひとの話以外を）聴くということ」よりもその選択性の度合いが高いと述べられている。これはどういう意味だろうか。鷺田（2000）から考えるに選択の度合いが高いというのは、選択する機会が多いということだと考えられる。「相手が親しいひとなら、きちんとその言葉を受けとめていないと、「ちゃんと聴いてるの？」「聴く気はあるの？」と問いつめてくる。」という記述がある。これは、誰かの話を聴いているときに、ひとはその内容すべてを聴くことはできず、ひとの話の中できちんと聴いているものと耳に入っていないものと聴いていないものがあることを意味していると考えられる。よって、「ひとの話を聴くということ」は二回の選択が行われているということが推察できる。すなわち、ある空間にある様々な音の中から「ひとの話」に注意を向けるという一回の選択に加えて、「ひとの話」の中からそのどの内容に自分の意識を向けるのかという二回目の選択があるということである。このように、「ひとの話を聴くということ」は「（ひとの話以外を）聴くということ」より何に注意を向けるのかということを選ぶ機会が多い。このような選択の回数を選択的な度合いと考え、その選択的な度合いが「ひとの話を聴くこと」が「聴くということ」を上回っているということを(1)ではモットを使って示していると捉えられる。これは第1章で示した(3a)の解釈にあたる。この捉え方は鷺田（2000）の内容と相違なく理解でき、(1)の解釈として問題ない。

次に、(15a)の用法でYが「読者が思っているもの」だった場合について考えていく。すなわち(2b)の場合である。このとき(1)は次のような文になる。（読者の皆さんもひとの話を聴くということは選択的な行為だと思っていると思うが、）読者が現在思っている以上にひとの話を聴くということはさらに選択的な行為である。読者の考えている「ひとの話を聴くこと」が選択的な行為であるという考えの度合いよりも、それが選択的である程度は実はそれ以上に大きいということである。ここで「読者が思っていること」を「読者もひとの話を聴くということは選択的だと思っている」としたのは、(1)のような評論文を読むときには当然、前の文脈を考慮して次の内容を読んでいくと考えるからである。前の内容を読者が前提として捉えていたならば、「ひとの話を聴くこと」を「聴くこと」の一例として捉えるに違いない。そうだとすると、(1)の前の部分で「聴くということは選択的な

行為だ」と述べられているから、「ひとの話を聴くということ」も「聴くということ」と同様に様々な音の中から「ひとの話」を聴くことを選ぶという一回の選択が起きていて読者は考えるはずである。このとき、(1)におけるモットの効果を考えると、「ひとの話を聴くということ」は「（ほかの何かを）聴くということ」とは違い、選択の機会は一回ではなくそれより多くあるということが述べられていると考えることができる。鷺田（2000）では「ひとの話を聴く」とときにはそのひとの話の内容をすべて聴いているわけではなく、その話の中の一部しか聴いていないことが指摘されている。つまり、ひとの話の中から何を聴くかということもひとは選択しているということである。このように、「ひとの話を聴くということ」は様々な音の中からひとの話に注意を向けるという選択とその話の中で何に注意を向けるかという選択の二度の選択が起きていているということを(1)のモットは意味していると考えられる。すなわち、(3a)の解釈である。

ここで気づくことは、(15a)の場合には、(2a)、(2b)のどちらの場合にしても解釈としては(3a)になるということである。比較する対象は違っても、最終的に意味するのは、ひとの話を聴くということは二段階の選択があり、一度しか選択の機会がないほかのものを聴くということよりも選択的な度合いが高いということである、と考えられる。

続いて、(15b)の用法でYが「聴くということ」である場合について(1)の意味を考える。(15b)は否定的用法なので、(1)は次のように表せる。聴くということは選択的な行為ではないが、ひとの話を聴くということは選択的な行為である。これは、「聴くということは選択的な行為である」と述べられている(1)の内容にそぐわない。したがって(15b)で(2a)の場合の解釈はあり得ないと考えられる。

最後に(15b)でYが「読者が思っているもの」である場合について考える。否定的用法の意味に基づいて(1)を解釈すると、次のようになる。ひとの話を聴くということは、読者が思っているようなものではなくて選択的な行為である。鷺田（2000）では、「聴くということ」は選択的な行為だと述べられており、このことから読者は「ひとの話を聴くということ」も選択的な行為だと考えるだろう。したがって、読者も「ひとの話を聴くこと」は選択的な行為であると捉えており、それを否定してひとの話を聴くことは選択的な行為であると述べるのは筋が通らず不適切な文となる。(15b)では(2a)と同様(2b)での解釈もできないということがわかる。

さて、上記では読者は「聴くということは選択的な行為である」という筆者の主張を理解したうえで(1)を読んでいるというように理解し議論を展開してきた。それは、読者は前の文脈を考慮してその内容を踏まえて次の文を読んでいくであろうという前提に立っているからである。しかし、筆者の立場に立って考えてみると、読者が前述の内容を十分に理解していない可能性を考え、その理解を深めるために再び同じ主張を繰り返しているということも考えられる。この場合には、(3b)のような解釈も可能となるだろう。すなわち、読者はひとの話を聴くということは選択的な行為だとは思っていないとは思いますが、実はそ

これは選択的な行為である、という解釈である。このように(3b)の可能性が考えられるにもかかわらず、(3a)の解釈をすべきだと主張しているのは、鷲田（2000）の文章全体的を検討した結果である。(3a)の解釈とすべきと考えた要素を大きく二つ提示する。一つ目は、鷲田（2000）では(1)の後に「聴くということが選択的な行為であるかぎり、それは何かを選んで聴くということであって、相手が伝えたいことをそっくりそのまま受け取るというのは、なかなかむずかしいものだ。」という記述があることだ。ここから、相手の話を聴くときには必ずその内容の全てを認識しているわけではないということが本文では主張されていると読み取れる。鷲田（2000）ではこの記述の前にも同様の内容が繰り返し主張されている。これらで主張されていることは、ひとの話を聴くときにはその話の内容すべてを聴いているのではないということである。ひとが話す内容の中で何に注意を傾けるのかということは無意識にでも選んでいるということである。このように、鷲田（2000）では(1)の後に、ひとの話を聴くことは様々な音の中からひとの話を選択することに加えて、そのひとの話の内容のうち何に関心を持って聴くのかという二度目の選択が行われているということが示唆されている。二つ目は、鷲田（2000）で(1)の後にはひとの話を聴くことについての記述しかないということである。これが意味するのは、(1)の文は、その直前で述べられていた「聴くということは選択的な行為である」という主張を強めるために同様の主張を繰り返すために述べられているわけではないということだと考える。(1)の後にはひとの話を聴くことに限定して話が進んでいる。それはつまり(1)は、「聴く」という一般的な話から、その中でも「ひとの話を聴く」ことについて今後話が限定して展開されていくという、次の話題への転換の文と考えるのが妥当だと思うからだ。(1)以降で新たな話が述べられているとすれば、(1)の文は前述の内容を踏まえて理解するのが適切ではないかと考える。したがって、(1)を(3b)のような解釈と捉えることができる可能性は低いのではないかと考えた。

以上より、林（2000）の主張に基づいて、(1)のモットの解釈をすると次のようになる。ひとの話を聴くということは、何を聴くかということについて二回の選択が必要であり、一度しか選択が行われないひとの話以外の何かを聴くときよりもさらに選択的な度合いが高い。なお、このときの「ひとの話を聴くということ」の比較対象としては(2a)と(2b)の両方が適用でき、いずれの場合も解釈としては(3a)になるという結果となった。

6.3. 木下（2001）について

木下（2001）はモットの様相を以下のように主張している。

- (22) a. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (比較直前の談話を基準とする)
b. (Xハ) (Yヨリ) モットZ (話し手の現時点を基準とする)

木下（2001）の主張に基づく(1)でのモットの表現はどのように解釈できるか考察していく。木下（2001）ではモットは主観的な視点表現であり、その視点のとり方について比較直前に談話に置く場合と話し手の現在・現実・現場に置く場合の二つあると述べている。木下（2001）ではどのような条件においてそれぞれに視点が置かれると述べられているのだろうか。その条件を整理することで、(1)が比較直前の談話と話し手の現在のどちらに視点を置いているのかを考察し(1)の意味を考えることとする。

木下（2001）では、比較直前の談話に視点が置かれているかどうかテストするためには「それより」を挿入してみればよいと述べている。「それより」が挿入できれば、直前の談話を比較の基準としてそこに視点が置かれているということだ。そこで(1)に「それより」を挿入してみる。

- (23) ひとの話を聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはそれよりもっと選択的な行為である。

(23)は文として成り立っている。したがって、(1)は比較直前の談話に視点を置くことができる。このとき、(23)における「それ」とは「聴くということ」であると考えられる。そのため、比較直前の談話に視点を置く場合には(1)は次のように表現できる。ひとの話を聴くということは、ひとの話以外を聴くことよりさらに選択的な行為である。これが意味するのは、6.2.で考察したように、ひとの話以外を聴くときには様々な音の中からその音に注意を向けるという選択が行われているのに対し、ひとの話を聴くときにはそれに加え話の中でどこの部分に注意を向けるかという二回目の選択が行われているということである。すなわち、視点が話し手の現時点にあると考える場合、比較対象は(2a)であると考えられ、解釈は(3a)となる。

次に話し手の現在・現実・現場に視点が置ける条件を探る。木下（2001：19）では「視点の基本には話し手がいる「現在」に視点を置くことである。」と述べられている。話し手の現在に視点が置かれているときには「今より」「今の状態より」「現実より」「実際より」という意味があるとされている。しかし、それはそのような意味があるということであり、比較直前の談話に視点が あるときのように、それらを挿入すれば意味が完全に通じるということではない。

- (17) a. もっとお金があったらなあ。（木下 2001：19）
b. （今より）もっとお金があったらなあ。
(24) a. もっとたくさん召し上がってください。（木下 2001：20）
b. ?（今より）もっとたくさん召し上がってください。

実際に(17a)、(24a)はともに木下(2001)で話し手の現在・現実・現場に視点がある例として挙げられているが、「今より」を挿入して(17b)は意味が通じるが(24b)は発言としては違和感がある。このことから、話し手の現時点に視点がある場合には「今より」「今の状態より」「現実より」「実際より」以外にも意味があると考えられ、木下(2001)の記述ではそこに視点が置ける条件は不明確である。そこで、木下(2001)に出てくる例文を比較し共通点を見出してみたい。

- (16) (レストランで料理を食べながら)前に食べた時はもっとおいしかった。(木下2001:19)
- (17) もっとお金があったらなあ。(木下2001:19)
- (24) もっとたくさん召し上がってください。(木下2001:20)
- (25) あの映画はもっと面白いと思っていたのだが、期待外れだった。(木下2001:20改)
- (26) もっと大きいのはありませんか。(木下2001:20改)

これらの例における共通点は、モットの後で「現在ではないこと(過去や未来のこと)」または「実際に起こっていないこと・現実とは違うこと」について言及されているということだ。したがって、本稿では話し手の現時点に視点が置ける条件を次のようにまとめる。

- (27) モットの後で「現在ではないこと」または「現実には起こっていないこと」について言及されている。

では、(1)の場合は、(27)の条件に当てはまるかどうか検証していきたい。(1)の場合、「(ひとの話を聴くという)は選択的な行為だ。」ということが(27)の条件を満たしていれば、(1)は話し手の現在に視点が置けるということになる。まず、(1)はモット以後で「現在ではないこと」について言及しているかについて考える。言及しているとしたら、(1)は「昔はひとの話を聴くことは選択的な行為だった(けど今は選択的ではない)」または「ひとの話を聴くということは(今は選択的ではないが)将来的には選択的な行為になるだろう。」という意味になる。しかし、(1)はそのような意味ではない。次に、モット以後で「現実には起こっていないこと」について言及されているかについて考える。言及されているとしたら、(1)は「現実にはひとの話を聴くということは選択的な行為ではないが…」という意味になる。(1)は、ひとの話を聴くということは選択的な行為であるという主張をしている文であるので、これも話が合わない。以上より、(1)は話し手の現時点に視点は置かれていないと考えられる。

木下(2001)の主張に基づくと、(1)は比較直前の談話に視点が置かれていると考えられ

る。このとき(1)は、ひとの話を聴くということは二回の選択が行われており、一回の選択しか行われないひとの話以外を聴くときよりもさらに選択的な度合いが高いという意味であると解釈できる。選択の回数を選択的な度合いと考え、その選択的な度合いが「ひとの話を聴くこと」が「聴くということ」を上回っているという(3a)の解釈である。

7. 結論

奥村（1995）、林（2000）、木下（2001）の研究をもとに(1)がどのような解釈になるのか考察してきた。結論として、(1)に適用可能な林（2000）、木下（2001）のどちらの主張を基にしても同じ(3a)解釈となった。それは、ひとの話を聴くということは、何に注意を向けるかという選択の機会が多いという意味で、ひとの話以外を聴くことよりも選択的な度合いが高い行為である、という解釈である。最初に疑問点として挙げた「ひとの話を聴くということ」は、「（ひとの話以外を）聴くということ」と「読者が思っていること」のどちらと比較してモットなのかということは、どちらが比較対象だとしても結局解釈としては同じになることが 6.2.で考察したときにわかった。また、比較対象が同じ「読者が思っていること」である場合でも、文章全体の構成の捉え方によって解釈が異なることも同じく 6.2.で見受けられた。つまり、今回の場合にはモットの比較対象が何かということ(1)の解釈には関係がなかったということが結論づけられる。(3a)と(3b)の解釈の違いが生まれたのは、モットが出てくる前の談話を前提として捉えているか否かにあったのである。ここでの前の談話というのは、「聴くということは選択的な行為である」という文脈である。「聴くということは選択的な行為である」ということ前提として(1)を捉えると(3a)の解釈になり、「聴くということは選択的な行為である」という内容を考慮せずに(1)を捉えると(3b)の解釈になるという具合だ。結果としては、6.2.で考察した通り、説明的文章の場合には前の文脈を考慮して文章を読み進めていくと考えることのほうが一般的であるという思考に加え、鷺田（2000）の文章全体を読み取った結果、(1)が(3b)の解釈である可能性は小さいと結論づけられた。

ではなぜ(3b)のような解釈も十分に可能であると考えてしまったのであろうか。それは、「モット選択的な行為」という表現にあるに違いない。2.1.で記述したように、程度副詞であるモットは程度性をもつものにかからなくてはならない。しかし、今回は「選択的な」という単語にかかっており、「選択的であること」についてその度合いに幅があるということは一般的には考えにくい。選択的であるかないかの二択であると考えることも十分に言えるからである。しかし(1)は前後の文脈から、選択の回数を選択の度合いと考えさせるという、「選択的な」という語句に程度性を持たせている文章であった。この、一般的には程度性がないように感じられる「選択的な」という単語を前後の文章で幅を持つ語句として(1)では表現していたことが、(3a)のような解釈を不自然と感じ、(3b)のような解釈の可能性を考えたとという間違いが生じた原因に違いない。本稿で分かったのは、モットが程度性を持つ成分に係るということは極めて重要な性質であり、それが成り立つようにしかモットの解釈はできないということである。

8. 参考文献

- 奥村大志（1995）「「もっと」についての考察」『日本語教育』87：91-102.
木下恭子（2001）「比較の副詞「もっと」における主観性」『国語学』52：16-29.
佐野由紀子（1998）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』195：112-99.
澤田治美（1993）『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』.日本語研究叢書第5巻.東京：ひつじ書房
仁田義雄（2002）『副詞の表現の諸相』.新日本語文法選書3.東京：くろしお出版
林奈緒子（2000）「比較構文に出現する程度副詞について—「さらに」の分析を中心に—」『筑波応用言語学研究』7：1-14.
鷺田清一（2000）「聴くということ」植田正治・鷺田清一『まなざしの記憶—だれかの傍らで』138-145.東京：株式会社阪急コミュニケーションズ
渡辺実（1986）「比較の副詞—『もっと』を中心に—」『学習院大学言語学共同研究書紀要』8：65-74

9. 付録：鷺田清一（2000）「聴くということ」全文

聴くといえ、だれもおそらく、耳で、と答えるだろう。聴覚は鼓膜に伝わる空気の振動を聴覚神経が脳に伝えて……と、むかし学校で習った記憶がある。しかし、聴くという行為が、耳です、ただたんに音響情報を受けるという受動的な行為だととはとても信じられない。

たとえば、数名がおなじ部屋にいてもおなじ音を聴いているとはかぎらない。どこからともなく響いてくるBGMを聴いているひともいれば、作文しているワープロのキーを打つ音に神経を集中しているひとや部屋の外の鳥の鳴き声に耳を澄ましているひともいる。後者のひとたちにはBGMの音はほとんど聞こえていない。走る電車のなかにいても、となりのひとと話していると、あるいは本を読んでいると、その轟音はほとんど耳に入っていない。聴くというのは、こちら側からの選択行為でもあるのだ。

ひとの話聴くというのは、それ以外に聴くものがないようにみえるが、じつはもっと選択的な行為である。相手が親しいひとなら、きちんとその言葉を受けとめていないと、「ちゃんと聴いてるの？」「聴く気はあるの？」と問いつめてくる。

「愛さないと見えないものがある」と言った哲学者がいる。「愛が認識を基礎づける」という言い方で。「愛さないと」という言い方がちょっと重すぎるとすれば、「相手に関心がない」と言い換えてもよい。

聴かれるほうからすれば、相手がじぶんに関心があるのかどうかは、その聴き方ですぐにわかるものである。だからこちらの聴き方しだいで、愛されていると感じたり、じぶんのことなんかこのひにとってはどうでもいいのだと感じたりもする。正確に、そして繊細に。だからこそ、対話においてはしばしば、語るほうが先に傷つくのである。逆の言い方をすると、聴くということが選択的な行為であるかぎり、それは何かを選んで聴くということであって、相手が伝えたいことをそっくりそのまま受け取るというのは、なかなかむずかしいものだ。そしてそこにじぶんが出る。何を聴くかというところに。

聴くというのは、相手の言葉をきちんと受けとめることである。理解できるかできないかは、ふつうおもわれているほど重要ではない。それより話すほうが「わかってもらえた」「言葉を受けとめてもらえた」と感じるほうが重要である。なぜなら、じぶんについて話すことは、じぶんを無防備にすることだからだ。逆に言えば、何でも話せるというのは、相手にじぶんが、いまのままでも十分に、そして（もしあなたがこうしてくれるなら、といった）条件つきではなくそのまま受け容れられていると感じることだからである。「わかってもらえる」というのは、苦しみを「分かちもってもらえる」ということでもあるのだ。ちなみに西欧の言葉で、シンパシーというのは「苦しみを分かちもつ」という意味だ。

聴くことの力というものもそこにある。むかしある新聞で人生相談をしていた宇野千代さ

んが、いつも「あなたは……だと言うんですね」というフレーズを連発して、相談をもちかけるひとの言葉をほとんどそのまま反復するだけの「相談」をしていたが、その効果もそこにある。相手の苦しみをそれと認め、受け容れることは、それに同意することでも同感することでもない。心をひとつにするのでも、理解できるというのでもなく、言葉をそのまま受けとめるということそのことに意味がある。聴くだけという受動的な行為がケアにおいてはもっとも深い力をもちうるのも、そういうわけである。

こころのケアやカウンセリングにおいて、慰めの言葉や助言よりも、「こうなんですね」と繰り返して確認することが大きな意味をもつのは、おそらく、そういう語りのなかで語るひと自身がみずからを整えるような「物語」を紡ぎだしていくことになるからである。

聴くというのは相手の鏡になろうとすることでもある。その意味で、他者のケアとは、他者のセルフ・ケアをケアすることでもある。

語るひとは聴くひとを求めている。語ることで傷つくことがあろうとも、それでもみずからを無防備なまま差しだそうとするのである。ケアにおいてそのリスクに 대응するのは、「関心をもたずにいられない」という聴く側のきもちであろう。「だいじょうぶですか？」「なにかお手伝いできることはありますか？」。そういう関心が貫いてはじめて、ひとは他人を聴くということが可能になるのである。

とはいっても、ほんとうに苦しいことについてひとは話しにくいものだ。なかなか話したくないものだ。忘れてしまいたいということもある。どのように語っても追いつかないという想いもあるだろう。だから、そこから漏れてくる言葉は、ぷつつ、ぷつつと途切れている。だれに向けられるでもなく、ぼろっとし零れるだけ。じぶんにとってもまだ言葉になっていないような言葉、ひとつひとつその感触を確かめながらでないとい音にできない言葉だ。

そういうかたちのなさに焦れて、聴くひとは聴きながらつい言葉を継ぎ足してしまう。ただ相手の言葉を受け止めるだけでなく「～ということなんじゃないですか、だったら…」と解釈してしまう。こうして話す側のほうが、生まれかけた言葉を見失ってしまう。

じっくり聴くつもりが、じっさいには言葉を横取りしてしまうのだ。言葉が漏れてこないことに焦れて、待つことに耐えられなくなるのだ。

ホスピタリティ、つまり歓待（＝他者を温かく迎えるとういこと）においては、聞き上手といった素質の問題ではなく、どのようにして他者に身を開いているかという、聴く者の態度や生き方が、つねに問われているようにおもう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、指導教員である上山あゆみ先生には大変お世話になりました。テーマ決めの段階から、論文の基本的な書き方に至るまでたくさんの助言をいただきました。貴重な時間を私のために割いていただいたき本当にありがとうございました。この場を借りて心から感謝申し上げます。

また、久保先生・下地先生には講義を通じて言語学に関する様々な知識や技能をご教授いただきました。また、同じ言語学研究室の同期には様々な場面で大変助けていただきました。多くの方々に支えられてこの論文を書き上げることができました。本論文を執筆するにあたってお世話になった方々すべてに感謝いたします。